



はじめまして!  
避難所担当職員です

大手公民館避難所担当職員となりました畑中悠子です。

避難所担当職員は、地区在住の市職員が指定され、災害時にはまず避難所に参集し、避難所の開設、初期運営、災害対策本部との連絡に当たります。そのため、平常時から避難所運営委員会に参画し、地域の皆様とともにいざという時に備えてまいります。

市内160カ所の指定避難所のうち、避難所運営委員会を立ち上げたのは現状21カ所にとどまっています。大手公民館では、今年4月にいち早く運営委員会を立ち上げました。とはいえ、要援護者優先の避難所であることなど、まだ一つ一つの課題を手探りで整理している段階です。災害時に「想定していたこと」を皆の共通認識として一つずつ増やしていくことが、

災害に強い地域づくりのために大切に考えます。共に知恵を絞っていききたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。



公民館北側に完成した中央地区防災倉庫



各班非常時に備えて熟議



**新!**  
いきいき  
元気大学  
に入学して

百瀬 隆  
(六九町会)



講師の百瀬みどり先生

2年半前、47年ぶりに松本にもどり、あり余る時間を利用して、夫婦で大手公民館主催の体操教室「いきいき元気大学」に入学しました。赤羽先生の熱心な指導のおかげで、日常的に運動をする習慣が身につきました。

赤羽先生の勇退にとともに、5月から百瀬先生の指導による「新!いきいき元気大学」に入学させていただきました。

「ストレッチで心も体もすっきり」「しっかりと動いて足腰しようぶ」など、テーマに沿って運動しています。講義で運動の目的や意義を学び、実技で実際に体を動かしてリフレッシュしています。百瀬先生はエネルギーギッシュで元気はつらつ、「元気大学」そのものです。受講生は元気

印のパワーをいただき、ユーモア溢れる実技指導で、体の筋肉だけでなく、笑いの中で顔の筋肉も鍛え、心の栄養も吸収しています。「健康寿命延伸」を標榜している松本市に移住し、その恩恵をうけていることに感謝しつつ、これからも無理せず楽しく体を動かしていきたいと思っています。



「丸中コミュニティースクール」発足!  
花植えを通じた  
地域との交流に感謝

丸ノ内中学校 教頭

今井 俊文

6月8日(水)、今年も大手公民館の職員、公民館委員の皆様にご来校いただき、造園委員会の生徒とプランターの花植え作業をしていただき



生徒との花植え作業は楽しいね!

ました。子どもたちにとって大変よい機会となりました。「今回教えていただいた花植へのやり方は初めてでした。これからこのやり方を大事にして花植えをしたいと思えます。そして美しい花を咲かせていきたいと思えます。」  
(中谷委員長 3年生)

子どもたちのためにお力添えをいただけることに改めて感謝です。本年度より「丸中コミュニティースクール」も発足しました。今後も皆様との交流を通して連携を深めていけるよう努めていきたいと思ひます。

町内公民館長会視察研修

山梨県立フラワーセンター

ハイジの村を訪ねて

小寺 寛子(大柳町)



一面に咲き誇る花々

6月25日(土)、梅雨の間をぬってハイジの村、白州蒸溜所、シャトレレーゼ白州工場、原田泰治美術館と見学させてもらいました。安曇野市にも「ハイジの里」という施設がありますね。「ハイジの村」は大がかりな花園と、テレビアニメにでてくる「アルプスの少女ハイジ」をイメージしただけあって、かわいいヤギがいて子どもも楽しめるような遊具もあり、一日楽しめるような施設でした。歩き疲れたところでソフトクリームをいただきました。珍しい薔薇の味でしたがおいしくいただきました。



山梨県立フラワーセンター「ハイジの村」にて

白州蒸溜所では、昼食を食べてそれぞれがお買い物やウイスキー博物館の見学を行いました。そして、楽しみにしていたシャトレレーゼの工場見学です。ここは見学後にアイスクリームが無料で食べられるということ、がんばって3個食べました！お菓子の製造状況を見ながら食べるアイスはまた格別でした。食べものの話題ばかりになりましたが、最後に諏訪の原田泰治美術館を見学しました。その細やかで美しく繊細で温かい絵の数々に感動しました。色いろの見学させていただいて楽しい一日を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

松本城の野鳥たち 35

ムクドリ



写真は久保田佐久良さん(岡田在住)が、松本城の内堀で撮影

ムクドリはスズメ目ムクドリ科の鳥類の一種です。全長24センチほどで、およそスズメとハトの間ぐらいの大きさです。雑食性で植物の種子や果物、虫の幼虫を食べます。地上を歩いて餌を探すが多く、その時にはくちばしを草株の間に入れて開くことで、地面や草株にひそむ虫を探し食べます。駅前ロータリーや街路樹並木を巣とするため、人に嫌われることも多いですが、農耕地や草原で虫を捕るプロフェッショナルですから、畑や芝生のグラントキーパーの役目も果たしています。

長元坊 チョウゲンボウ

善隣友好の精神

多くの尊い命が犠牲になり、人々の心に大きな傷を残した太平洋戦争の終結から71年目を迎えた。昭和20年8月15日、ラジオから流れた天皇陛下のポツダム宣言受諾を知らせる終戦の詔勅(玉音放送)は、6歳だった私には全く記憶がない。だが、終戦直後、北海道の炭坑町で起きた騒乱の様子は幼かったが脳裏にしっかりと焼き付いている。当時私の父は石狩炭田の中でも、三井財閥が経営する大手炭鉱に勤めていた。戦争の拡大による石炭需要増大の中で、契約や徴用された朝鮮人労務者(家族持ちを含めて3,000人余)に、強制連行された中国人労務者(1000人余)と共に働き、生活していた。だが、我が国の無条件降伏によって天地が逆転。戦勝国となった中国人労務者が、徒党を組んで決起し、暴徒と化したのである。追い打ちをかけるように、日頃から待遇に不満を募らせていた一部の朝鮮人労務者も、この騒ぎに誘発され、夜

になるツルハシにスコップで武装して、中国人と朝鮮人の主導権争いの抗争劇が繰り広げられていた。無政府状態に陥ってしまった炭坑、危険を察知した幹部職員はいち早く潜伏。婦女子は家の中で息をひそめ一歩も外へ出られず、ただ怯えていた。保安要員の父や若手鉱員たちは、暴徒の破壊行為から炭鉱の重要施設を守ろうと、体を張ってひたすら進駐軍の到来を待った。幸いなことに、大方の朝鮮人労務者は、この破壊行為を批判。「善隣友好の精神」を貫いてくれたのである。お陰様で進駐軍を待つことなく平穏を取り戻すことができた。

だが、道内の夕張や他所の炭坑では、終戦と同時に「朝鮮進駐軍」を自称した朝鮮人労務者が、殺人・婦女暴行・略奪・襲撃と、悪の限りを尽くしたのは、史実でもある。慰安婦問題が合意に達したのを契機に、日本と韓国が相互理解を深め、歴史ある朝鮮通信使以来の善隣友好の精神に立ち返り、関係改善に努めるのが、両国政府の責務と考える。

井上 忠男(鷹匠町)